

☆年間第27主日(10月4日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 5章 1～7節)

わたしは歌おう、わたしの愛する者のために、そのぶどう畑の愛の歌を。
わたしの愛する者は、肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。
よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り良いぶどうが実るのを待った。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ
わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
わたしがぶどう畑のためになすべきことで、何か、しなかったことがまだある
というのか。
わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに、なぜ酸っぱいぶどうが実った
のか。
さあ、お前たちに告げよう、わたしがこのぶどう畑をどうするか。
囲いを取り払い、焼かれるにまかせ、石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
わたしはこれを見捨てる。
枝は刈り込まれず、耕されることもなく
茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。
イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑、主が楽しんで植えられたのは
ユダの人々。
主は裁き(ミシュパト)を待っておられたのに、見よ、流血(ミスパハ)。
正義(ツェダカ)を待っておられたのに、見よ、叫喚(ツェアカ)。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章6～9節)

(皆さん、)どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。
何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち
明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心
と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。終わりに、兄弟たち、すべて
真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて

愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

福音朗読 (マタイによる福音書 21章 33～43節)

そのとき、イエスは祭司長や長老たちに言われた。「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。さて、収穫の 때가近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。そこで最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』
だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」

朗読解説 ー主任司祭より皆様へー

爽やかな秋晴れが続いています。今日の主日まで「被造物を大切に
世界祈願日」の祈りがささげられます。今日は平日であれば「アシジの
聖フランシスコ」の記念日です。自然を愛し、自然とともに生きた聖フラン
シスコに少しでもあやかるようにしたいものです。私たちは自然によって
自然の中に生きていることを意識するようにしましょう。

今日の朗読では「ぶどう畑の話」が出てきます。ちょうど秋ですからタイ
ミングがいいのですが、昔からぶどうは栽培され大切にされていたことが
わかりますね。きっと神様からの祝福のしるしとされていたのでしょう。今の
日本でも様々な地域でぶどうが栽培され特産品になっているようです。
ぶどう狩りに出かけるのも、神様のお勧めかもしれません。

第一朗読 (イザヤの預言 5章1～7節)

「肥沃な丘にぶどう畑を持っていた」。良く耕し石を取り除き、よいぶどう
を植えた。そして実りの時のために、酒舟を掘り、よいぶどうが実るのを
待った。一生懸命に世話をし、収穫の時を待つ農夫の様子が描かれて
います。神はイスラエルの民をこのように導いてこられたのです。それは
何よりも神の導きに応えるイスラエルの姿を望んでいたからでした。しかし
この期待は見事に裏切られたのです。「しかし、実ったのは酸っぱいぶどう
であった」。神はきっとがっかりされたことでしょう。「なぜ」。神は自分の
期待に応えなかったイスラエルに問い返されるのです。

これは私たちの姿です。これほどまでに私たちのために働かれた神の
働きに対する忘恩でもあるのです。この神の嘆きを前に私たちは今何を
すべきなのでしょう。よいぶどうの実り、生活の中での愛のしるし、
隣人愛、私の小さな力を貸してくれるように望んでいる人たちへの誠実な
実行なのではないでしょうか。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章6～9節）

この手紙のこの部分は大変慰めに満ちた内容にあふれています。私たちの周りで起きるいろいろの出来事に惑わされずに、神に信頼し、真実なこと、気高いこと、名誉なこと、清いこと、徳や称賛に値することに励めば、平和の神が私たちとともにいてくださるでしょう。思い煩いをやめ、何事にも感謝し、祈りと願いをささげて、神に信頼していることが大事だとパウロは私たちに勧めています。神は私たちの現状をよく理解しておられるのですから、私たちはいたずらに思い煩う必要はないのです。その中で自分にできる最善のことを果たしなさいとパウロは勧めているのです。できる最善のことはイエスが私たちに勧めた「隣人への愛」です。それなくして神の私たちへの摂理はないのです。

福音朗読（マタイによる福音書 21章 33～43節）

第一朗読とリンクして、ここでもぶどうの話が出てきます。福音のこの部分も先週に引き続きユダヤ教の祭司長たちや民の長老たちに向けて話されていますが、この人々はある意味で神の前に責任ある立場にいる人たちです。民を導く立場にあるからです。自分の身の保証を安泰にすることを求めるのでなく、神の意志を知り、民に伝え、民を導くためにいる人たちなのです、ですからイエスはたとえ話でそのことを知らせようとなさるのです。この話で、イエスのご自分の身に起こることを前もって伝えられています。「農園の主人は自分の息子を送った」は父なる神がひとり子イエスをこの世界に送られたことを示しています。そしてその息子は殺されるのですが、イエスにおいては十字架刑に処せられて亡くなります。さてぶどう園の主人はそのことに対してどうなさるのか。祭司長や民の長老たちは農夫たちの仕打ちのひどさに、イエスが自分たちのことを言っているとも知らずに「ひどい目にあわせて殺し、ぶどう園は他の農夫たちに貸すに違いない」と答えるのです。

マタイはイエスの昇天後数十年後にこの福音を書くに当たって、このイエスのたとえ話が現実になっていると証言しているのです。マタイが福音を書いた時代ではユダヤ人ではない多くのキリスト者が広い世界に広がり始めていたのです。そしてそれはとても力強いものでした。

私たちが気を付けて神の意志がどこにあるのかを探さないと、神の望みから遠く離れた人になってしまうかもしれません。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光